

ギデンズとイギリス知識人

—— R. ウィリアムズ, E. P. トムスン, T. H. マーシャル ——

宮 本 孝 二

キーワード：A. ギデンズ, R. ウィリアムズ, E. P. トムスン,
T. H. マーシャル

はじめに

第1節 文化と社会——レイモンド・ウィリアムズ

第2節 主体的行為と構造——エドワード・P・トムスン

第3節 福祉国家と市民権——トマス・H・マーシャル

おわりに

はじめに

筆者は35年前に修士論文でアンソニー・ギデンズの著作を取り上げて以来、ギデンズ研究を継続し、『ギデンズの社会理論』（宮本，1998）を上梓し、その後もいくつかの論文を執筆してきた。しかし、宮本（1998）においてはギデンズ社会理論の全体像と可能性に焦点を合わせたため、ギデンズが研究した個々の社会学者について丁寧な検討をすることができず、その後もその課題を十分に果たさないまま今日に至ってしまった。そこで新たに「ギデンズと社会学者たち」という研究プロジェクトを開始し、順次ギデンズの社会学者研究について内容を明らかにしていくことにした。社会学者の枠を超えた人文学者、社会科学者である3人のイギリス知識人についてのギデンズの

研究を取り上げる本稿は、その第五作目にあたる¹⁾。

本稿では、まず第1節において、イギリスのニューレフト運動の第一世代であり現在のカルチュラル・スタディーズの開祖と目されるレイモンド・ウィリアムズ（1921-88）についての研究を取り上げる。Giddens（1982）に収録されたウィリアムズ論は70年代後半にタイムズ特別版に掲載されたものの再録であるが、ウィリアムズの人生と70年代半ばまでの著作の要点を概括し、最後にその文化的唯物論の評価が試みられている。それはギデنزが当時企図していた史的唯物論の現代的批判との関連性で興味深い。

次に第2節では、やはりイギリスのニューレフト運動の第一世代の著名な歴史家エドワード・P・トムスン（1924-93）についての研究を取り上げる。Giddens（1987=1998）に収録されたトムスン研究は、彼とニューレフト運動の第二世代のペリー・アンダーソンとの論争を題材に、構造と主体ないし主体的行為との関連という社会理論の中心問題を検討している。ギデنزらは1980年代半ばに自らの構造化理論に一応の決着をつけるに至ったのであるが、まさにその中心問題について取り組みを進めていたのである。

そして最後に第3節において、1950年に『シティズンシップと社会階級』を刊行し、それ以降のシティズンシップ（狭義には市民権、広義には市民の権利と義務を含む市民的特性の総体を意味する）の議論に多大な影響を与えたトマス・H・マーシャル（1893-1981）についての研究を取り上げる。ギデنزらは1973年の先進社会の階級構造以来、81年の史的唯物論の現代的批判、85年の国民国家と暴力、そして90年代から本格化した新しい社会構想としての第三の道論に至るまで、マーシャルに言及していたが、90年代半ばにGiddens（1996）に収録されたマーシャル研究を発表した。90年代にギデنزの高度近代論が展開する中で福祉国家の見直しが進められた際に、マーシャルの問題提起に再度目が向けられたのである。

それでは、以下の各節でそれぞれの論文の内容を紹介しつつ、ギデنزが

1) これまでの四作は宮本（2015a, 2015b, 2016a, 2016b）。

これら3人のイギリス知識人の著作を取り上げた理由を明らかにしていきたい。ただし本稿はそれぞれの知識人についての研究ではなく、彼らの著作は参考文献ではないので、本文中に書誌情報を記載するにとどめている。

第1節 文化と社会——レイモンド・ウィリアムズ

本節ではGiddens (1982) に収録されたウィリアムズ論 ‘Literature and Society : Raymond Williams’ の内容を紹介した上で²⁾、その結論部分で示されたウィリアムズの文化唯物論批判に焦点を合わせ、ギデンズがウィリアムズ論を著した理由を明らかにしたい。ただし、ウィリアムズはさきわめて多産な作家でウィリアムズ論も多いが³⁾、本稿はギデンズのウィリアムズ論のみに焦点を合わせており、ウィリアムズ研究ではないことを最初にお断りしておきたい。

ギデンズのウィリアムズ論は自然科学と人文科学の亀裂をめぐるイギリスでの議論の紹介から始まり、そこに登場しなかった社会科学の重要性を指摘する。自然科学と人文科学という古典的な対立図式は無効化しており、社会科学にこそ科学哲学や詩学を合流させる新たな可能性が見られるというのである。

続けてギデンズは、マルクス主義も、現象学や構造主義と取り組み変容しつつあることを指摘する。マルクス主義も社会科学と同様の流れにあり、唯物論の対極にある文化論がマルクス主義でも盛んになってきた。そこでギデンズは、イギリスの新左翼運動が合流して創刊されたマルクス主義の拠点雑誌であるニューレフト・レビューに言及する⁴⁾。そこには60年代になって、

2) 初出はGiddens (1982) でGiddens (1996) に再録された。

3) 日本でのウィリアムズ研究として文学ないし文化研究では山田 (2013)、大貫 (2016)、社会学では吉澤 (1999, 2001, 2009)、高山 (2010) などの著作が見られる。

4) 雑誌『ニューレフト・レビュー』は1950年代イギリスの左翼系の雑誌『ニュー・リーズナー』と『ユニバーシティ・アンド・レフト・レビュー』が統合して1960年に創刊された雑誌。その経緯はLin (1993=1999: 42-52) が詳しい。

いわゆるニューレフト第二世代のペリー・アンダーソンらがフランスの構造主義を積極的に紹介し導入し始めたのだが、それに対して第一世代を代表するエドワード・トムスの批判がなされ論争が生じた。そしてその過程で第一世代はその雑誌を離れることになったが⁵⁾、第一世代に属するウィリアムズは貴重な例外であったとギデンズは見る。というのも1970年代の末に、ウィリアムズはアンダーソンら第二世代の編集者たちからの長大なインタビュー (*Politics and Letters, : Interviews with New Left Review*, Verso, 1979) を受けているからである。ギデンズのウィリアムズ論は、このインタビューに基づいて展開される。

インタビューでは彼の生い立ちから語られる。ウィリアムズはイギリスでは比較的辺境的な色彩の強いウェールズ地方の小村の出身ながら、大学の最高峰であるケンブリッジ大学に入学した。彼自身はそのような生い立ちと研究業績を関連づけられるのは好まないようだが、多くのウィリアムズ論では必ず言及されるようだ。

次に教育歴、学歴が語られる。ケンブリッジ大学在学中に第2次世界大戦に徴兵され、対戦車部隊で活躍し、ノルマンディー作戦にも参加し、戦後再び大学に復帰した。ケンブリッジ大学では社会主義クラブに所属し、戦前から共産党に入党していたが、徴兵された際に、すでに共産党から離脱したようだ。革命家というよりは改革派的であり、50年代の政治活動への幻滅と自己懐疑の時代が、彼を熱狂的な研究活動に向かわせることになった。アカデミズムにおいてウィリアムズはリーヴィスの影響を受ける⁶⁾。文化への関心はその影響下で生じたが、そこから独自の文化的政治の形成に向かった。リーヴィスの影響は三つある。第1に、学術的文芸批評やジャーナリズムに

5) ペリー・アンダーソンの編集権掌握の経緯と顛末はLin (1993=1999: 121-8) が詳しい。

6) 当時ケンブリッジ大学の英文学教授であったF.R. リーヴィスについては、山田 (2013: 33-44) が紹介している。

対するラディカルな批判、第2に実践批評⁷⁾、第3に教育の重要性の認識である。そして、ウィリアムズはオックスフォードの労働者教育協会⁸⁾で教育職に就き、その経験が研究に直接的な影響を及ぼし研究を活性化し、1961年にはケンブリッジ大学講師に採用されるに至った。

ウィリアムズは『文化と社会』(*Culture and Society 1780-1950*, Chatto & Windus, 1958. 若松・長谷川訳『文化と社会』ミネルヴァ書房, 1968年)および1961年の『長い革命』(*The Long Revolution*, Pelican Books, 1961. 若松ほか訳『長い革命』ミネルヴァ書房, 1968年)で有名になった。後者は前者の増補改訂版であり多くの読者を得た。『文化と社会』でウィリアムズは、文化の一般理論が新たに必要であり、それが可能な時期に来ていると主張した。文化という言葉も概念も産業革命期に登場したことを解明したウィリアムズは、19世紀から20世紀半ばまでのその概念史を描く。それはまた、産業や民主主義や階級や芸術というキーワードの誕生と展開の歴史とも重なっている。『文化と社会』や『長い革命』で強調されたのは、産業社会という新しい社会の推進力である産業主義とは別に流れる、道徳的な知的な関心という特別な領域の存在なのであった。

『長い革命』では文化革命が産業化や民主化とならぶ第三の革命として位置づけられる。そしてそれは論争を巻き起こし、批判はウィリアムズの社会学的構図に向けられた。それは知的で文芸的な文化を、大衆の「感情構造」と関連づけるという視点であった⁹⁾。また、左翼にもかかわらず産業主義を資本主義より重視していること、文化が内包する多様な領域の差異を軽視していること、分析において階級対立構造との関連づけが不足していること、そして政治や経済から分離した過程として文化的展開を位置づけていること

7) 実践批評とはリーヴィスの提唱した文学鑑賞の基本的立場で、鑑賞ないし批評は研究者の特権ではなくいかなる個人にも開かれていることを主張した。高山(2010: 63-74)および山田(2013: 39)を参照されたい。

8) 労働者教育協会(WEA)については、山田(2013: 68-72)が紹介している。

9) ウィリアムズの提示した「感情構造」については、高山(2010: 81-5)および山田(2013: 44, 142-3)、を参照されたい。

に、批判は向けられたのである。

多くの批判にもかかわらずウィリアムズはその後多作であった。その中心問題は「参加社会主義」に向けた長い革命であり、それを推進するための文化診断、文化批判の実践であった。60年代後半の『コミュニケーション』(Communications, Penguin, 1962. 立原宏要訳『コミュニケーション』合同出版, 1969年)や『テレビジョン』(Television: Technology and Cultural Form, Fontana, 1974)という著作にもそれは示されているが、彼の小説も演劇論も文芸批評もすべてがその中心問題への取り組みの成果なのであった。

小説は自伝的要素が色濃い作品であったが、たんに個人的経験の記述にとどまらず、社会変動の広範な動きに関連づけられていた。労働者階級の文化をプロレタリア小説と等置することには否定的であり、小説『辺境』(Border Country, Penguin, 1964. 小野寺健訳『辺境』講談社, 1972年)では自らが育った労働者階級の共同体を理想的に描いたり固定的にとらえたりすることなく、それらの変動を描いた。個人的なものとの公共的なものとの相互転換、私的経験や感覚と感情の構造との相互連関こそがウィリアムズのテーマであった。

演劇論でも同様であった。『イブセンからエリオットまでの演劇』(Drama from Ibsen to Eliot, Oxford University Press, 1952年)のイブセンは学部学生の時代からの研究対象であり、その演劇にはイブセン自身の感覚が結晶化されていること、主人公の絶望との戦いは主観的なプロジェクトであることが把握されていたが、後にそのような個人的解放は社会的解放に照合されて位置づけられるようになった。プレヒト論でもそうだった。ウィリアムズは、プレヒトをたんに政治的な演劇家にとどまらなくと高く評価する。演劇に政治という舞台外の出来事を持ち込むのではなく、演劇行為に過去の現実の出来事を具現化させ、別様の可能性を探究することによって、それまでの演劇の枠を超えようとした。

以上のようにウィリアムズの1970年代半ばまでの活動と著作を紹介したギデンズは、ウィリアムズの著作には未解決の困難さがあると指摘する。文化概念の過度の中心化であり、イギリス的要因やイギリスの歴史への閉じこもりであり、一連の潜在的な解釈学的問題の見逃しである。彼が社会史の新次元を開いたのは大きな功績であり、その成果が『文化と社会』と『長い革命』であり、その含意はいまだ汲み尽くされてはいないことをギデンズは認めるが、社会概念の軽視、社会と文化の解釈学的媒介過程についての掘り下げ不足、保守的な文化概念（ドイツロマン主義から発している）への固執は批判されるべきだというのである。

ウィリアムズによる文化と産業ないし技術との対置は、資本主義的蓄積過程が前提であることを曖昧にできてしまっていた。また、それは唯心論と唯物論との対置になり、このことが文化を社会より重視することにつながってしまい、社会は調和的統一体としてみなされた。社会が依存と闘争の諸関係と理解されるなら、文化と産業の本質的媒介の解明が可能となったであろう。しかしながら、感覚ないし感情の構造と日々の経験の関連が曖昧なままに放置されてしまったとギデンズは批判する。

日々の経験は連続性と変動を含む。それは『キーワード』（*Keywords : A Vocabulary of Culture and Society*, Fontana Press, 1976. 岡崎康一訳『キーワード辞典』晶文社, 1980年）で分析された言語的変動に示される。しかし、個人的経験が自己の経験として自分自身に認識されるのは言語の公共的カテゴリーを媒介にしてである。私的経験と社会的文化の二元論は否定されるべきであり、ウィリアムズには明らかにその傾向がある。人間の知識の歴史的特性とその分析の課題は『キーワード』で提起されていたのであるが、言語の変化はたんに言語の変化として扱われるのではなく、歴史的過程において分析されなければならない。そのような人間の知識の相対性の問題に、ウィリアムズは『キーワード』では適切に対応していなかったとギデンズは指摘する。

1976年の『マルクス主義と文学』(*Marxism and Literature*, Oxford University Press, 1977.)という理論的で抽象的な議論を展開した著作において、ウィリアムズは相対主義の問題に取り組んだとギデンズは認める。そこでは、理論体系としてのマルクス主義が、個々の作品の集合体である文学に適用された。実のところ、それまでの著作はマルクス主義というよりは、ラディカル・ポピュリズム(民衆の視点を徹底する立場)と肯定的にも否定的にも許されてきたのである。

ウィリアムズはマルクス主義が開かれた柔軟な思想であると考え、文学とは何かを問うた。ここで提示されたのが文化的唯物論という立場であった¹⁰⁾。文化概念と感覚ないし感情構造という発想は一貫して維持されているが、言語と意味は生産と再生産の物質的過程の要素であるという視点が新たに打ち出された。しかしながら、そのような問題意識に基づく理論化の作業を、ウィリアムズは成功させることはできなかったとギデンズは判定し、『マルクス主義と文学』以前の著作で示されていた文化中心主義のジレンマは、ここでも解決されないままであると結論づける。

以上がギデンズのウィリアムズ論の概要である。イギリスの左翼知識人には学生時代からそれほど関心がなく、ニューレフト運動にも参加したこともないギデンズが¹¹⁾、なぜこのようなウィリアムズ論を発表したのであろうか。直接的な動機は、前述のようにニューレフト・レビューが長大なインタビューを実施し、それが刊行され話題を呼んだことにあるのだろうが、それを紹介しつつ批判的な評価を加えることによってギデンズは何を言おうとしたのであろうか。要点は二つあると思われる。第1に、文化に焦点を合わせて社会の構造と変動を論じることの妥当性であり、第2にマルクス主義ない

10) 文化唯物論については高山(2010: 313-432)、山田(2013: 238)、Lin(1993=1999: 258-67)が詳しい。

11) Giddens(1998: 33=2001: 54-5)で明言しているように、ギデンズは一貫してマルクス主義者ではなく、学生時代からも社会主義運動に参加したこともない。ハル大学で指導を受けたピーター・ワースリーはイギリスのニューレフトの一人として数えられる社会学者であった(Lin, 1993=1999: 119)のであるが、

し史的唯物論を社会理論としてどのように評価し位置づけるかという問題意識である。

ギデンズはマルクス主義者ではないが、マルクスの社会理論には多大な関心を寄せ、Giddens (1971=1974) 所収の長大なマルクス論を皮切りに、73年の階級論、81年の史的唯物論の現代的批判へと議論を展開した¹²⁾。このウィリアムズ論は、ギデンズが構造化理論の主要論点をほぼ確定させ、最強の社会変動論であり現代社会論であるマルクス主義の社会理論、すなわち史的唯物論の本格的批判をまさに現代的批判として展開すべくその作業を進めていた頃にかかれたと推測される。

ギデンズの関心は文化と社会の相互関連、長い革命における三つの変動論、そして文化唯物論にあるようだ。ギデンズにとって文化は有意味化する構造と意味規則を駆使したコミュニケーションの相互連関として成立する¹³⁾。構造化理論の枠組みからすると、文化構造は規制的な意味規則である規範によるサンクションによって正当化される構造や、物質的資源や権威的資源を動員し合うことによって成立する支配化構造との相互媒介的關係を示す。そしてそれらの構造化や、構造化間の相互媒介は、構造的条件を前提とした諸主体の行為によって実現するのである。したがって文化的実践を生産過程に組み込む文化的唯物論には共感する点もあるが、唯物論を大前提とするのには異論がある。それでは文化と社会の関連づけと言っても、結局のところ史的唯物論の枠内に閉じ込められてしまうからである。

ギデンズの史的唯物論のパワー論的批判は、資本の運動が引き起こす変動との区別と関連づけを前提に、パワーすなわち国家権力と諸運動が引き起こす変動をも設定し、社会変動論ないし現代社会論の再構築を企図したのであった。そのようなギデンズからウィリアムズに期待されたのは、文化論的

12) ギデンズのマルクス研究については宮本 (2016a) を参照されたい。

13) ギデンズの構造化理論についてはGiddens (1979=1989, 1984=2015) および宮本 (1998, 2011) を参照されたい。

視点からの史的唯物論の現代的批判の試みであったが、それは不十分なものと言わざるをえなかった。『長い革命』において、民主化ないし民主革命と産業化ないし産業革命、そして社会主義革命と並んで、文化革命の流れを置き、それらを長い革命として明確に認識したことを基点にして、文化論的視点からの史的唯物論の現代的批判を試みるのがウィリアムズに可能であったとギデンズは考えたのではないだろうか。

ギデンズが設定した史的唯物論の現代的批判の枠組みは、マルクスが明らかにした資本の運動がもたらす社会変動に、国民国家の形成と発展という社会変動を組み合わせ、その相互連関において近代化ないし高度近代化の流れを解明するというものであった。そのような変動過程に、多種多様な運動が生成されるが、文化運動もそこに位置づけられるべきであるとギデンズは見なしたのであろう。したがって、ウィリアムズがラディカル・ポピュリズムの立場から展開した著作を、史的唯物論への言語や意味作用の組み込みを試みた70年代の著作より、ギデンズはむしろ高く評価することになると思われる。そして、多種多様な運動が絡み合ってもたらす社会変動という視点は、次節で検討するトムスン論でも明示されるのである。

第2節 主体的行為と構造——エドワード・P・トムスン

まずトムスンという表記について説明しよう。Thompsonは通常はトンプソンと和訳されるが、日本では60年代に紹介された時点でトムスンと表記されたため、それ以降もトムスン表記が慣例となったようだ¹⁴⁾。イギリスでもエドワード・トムスンをエドワード・トンプソンと発音するという研究者が半数いるらしい(Lin, 1993=1999: 341)が、ギデンズ(1987: 203-24=1998: 275-301)に収録されている‘Out of the Orrery: E. P. Thompson on consciousness and history’でもトムスン表記が継承されているので、本

14) 福田敏一ほか訳『新しい左翼』岩波書店、1963年がトムスン表記を採用した。

論文でもそれに従うことにしたい。それでは「オーラリからの脱却」の内容を紹介していこう¹⁵⁾。なお、オーラリとは「オーラリ伯爵のゼンマイ仕掛けの天体儀」のことで構造概念を意味している。

反核運動のリーダーとしても有名なイギリスの歴史学者トムソンは、1960年代から70年代にかけて、当時発言力を増しつつあった構造主義的な傾向の歴史学者、なかでもペリー・アンダーソンと前節でも述べたように激しい論争を行った。この論文でギデンズはそれを対象にして検討を加えることによって、自らの構造化理論の意義を明らかにしようとしている。

ギデンズはトムソンを社会学的な思考様式をもつ歴史家と評価する。だからこそ生粋の歴史家でありながら社会学に大きな影響力を発揮しているのである。階級形成と階級意識の問題が社会学的分析の重要なテーマだからであるが、それだけではない。トムソンの歴史学の核心には、構造主義的な思考様式への批判がある。前節のニューレフト・レビューの紹介でも触れたように、ニューレフト第1世代のトムソンは、その雑誌の主導権を彼らから奪った第2世代のアンダーソンたちが積極的にフランス構造主義を導入したことにきわめて批判的である。また、構造主義的マルクス主義だけでなく、社会学的な構造機能主義にも批判的であった。

トムソンの著作の中に主体的行為の感覚を発見する社会学者は、それがまさに構造機能主義的な社会学に欠落していると認識したのである。人間は社会的な力に振り回されているだけの存在ではない。人間の行為には能動的要素があり、それを社会学が把握できないなら不完全な認識といわざるを得ない。トムソンは、積極的に自らの存在状況の構築と再構築を行う行為者としての人間の能力を強調した。トムソンがマルクス主義者であり、そのマルクス主義原理は「自らの歴史をつくる」人間というところにある。これがトムソンの基本的人間像であり歴史像なのである。そのような主体的行為と歴史

15) ただし、この邦訳には不適切な訳が散見する。以下の紹介で重要な点はその都度注記することにした。

に関する問題が、トムスンとペリー・アンダーソンとの論争で明らかにされていった。

以上のように、トムスンの議論の核心を明示したギデンズは、次にアンダーソンとの論争の具体像に迫る。まずトムスンの名著『イングランド労働者階級の形成』(*The Making of the English Working Class*, Victor Gollancz, 1963. 市橋・芳賀訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社, 2003年)の要点を紹介し、次にアンダーソンの批判を紹介し、論争の焦点となる階級と歴史について両者の主張を総括する。

トムスンの主体的行為と歴史への言及には3つの特徴がある。第1に、トムスは膨大な匿名の大衆を主人公にした歴史の著述を目指し、第2に、人間の活動、主体的行為をその文脈の中で理解することを目指し、第3に、階級は構造でもカテゴリーでもなく実際に人間関係の中で生じるものとして把握することを目指す。トムスは構造としての階級イメージに反対し、階級を擬人的な概念とすることにも反対する。階級は意思も意識も道徳律ももたない。意思や意識や道徳をもつのは行為者だけである。

トムスンの著作は労働史の通説に対抗している。労働者階級はリーダシップ確立以前は集団エネルギーに欠如していたという見方や、統計的な分析の対象としてたんに数字で表現されるという見方や、後の労働者組織に発展していく労働者階級の初期的発達があったという見方、以上のような3つの通説にトムスは反発する。労働者が活発に闘争する場をもっていたことが無視されており、また、階級の根源にあった闘争の担い手の存在や思考が無視されているからである。

イギリスにおいて最初の労働者階級の政治団体と見なされるロンドン通信協会について、トムスはそれが労働運動ではなく大衆的な急進主義を継承したものと描く。より古い反抗の形態と新しい形態を橋渡しする存在だというのである。急進主義的な古い伝統からの離脱と、民主的な参加という新しい思想の育成がなされた。この思想がその後の労働者階級の運動に継承され

たのである。一つの文脈の中で反動的な特徴を持つ観念が¹⁶⁾、他の文脈では進歩的な方向へと向けられることがある。ウェーバーの資本主義の精神とプロテスタンティズムの倫理同様、宗教的信念に基づく運動が、客観的には労働運動となるというわけである。

トムスは、そのような宗教的な観念と実践とのかかわりに注目した。メソディスト主義が労働者階級に対して自信を与え、組織能力を促進したとトムスは明らかにした。反抗的なセクトの運命論が、一層良きことの到来を期待することによって、世俗的改革熱を刺激されたというのである。

そのような宗教の影響と並んで、犯罪的な様相を呈する暴動と暴徒の伝統も、労働運動の発展につながっていた。法律への嫌悪感、暴動、民衆の反乱は、特権階級や国家への反抗を促し、民主的に活気づけられた労働運動の兆候を示していた¹⁷⁾。

トムスの議論は、19世紀初期の労働者階級形成への主観的影響を描いた後、それに続く客観的影響、社会変動を述べている。それはあたかも構造的な見方のようなものである。1831年から32年にかけての潜在的な革命の危機的状态、というトムスの判断も、そこに主観的な影響と客観的な影響の相互の絡まり合いが一層探求されるべきところであった。トムスはマルクス主義の土台と上部構造というモデルには賛同せず、社会的存在と社会的意識との弁証法を唱える。歴史を書くことによってのみそのような社会的過程について描くことが出来るのであって、概念的に関連づけられる機械的な因果関係を押し付けても無意味である。トムスは、社会的存在の影響下で人間の意識の自律性が成立する社会過程の理解を目指したのである。

以上のようなトムスの議論に対してアンダーソンが批判を展開した。その論点の主要なものが主体的行為の問題である。それは意識的で目的的な行

16) 邦訳では「反動的」は「大いに反応する」とされている。Giddens (1987 : 207 = 1998 : 280)

17) 邦訳では暴動や反乱も民衆の嫌悪感の対象になっているが、嫌悪感の対象は法律だけである。Giddens (1987 : 208 = 1998 : 281)

為であるが、アンダーソンは目的に3種類あるという。日々の生活における個人的な目的、日々の組織的な活動がもつ目的、そして既存の社会的関係を積極的に変えようとする目的的な集団の行動の目的である。トムスンが重視する18世紀と19世紀のブルジョア革命は、アンダーソンから見れば主体的行為の最初の形態、近代的な主体的行為としては成立していない。

アンダーソンは、トムスンが3種類の目的を混同していると批判し、トムスンが批判するアルチュセール同様、トムスンも歴史における主体の意図を適切に位置づけることができていないと判定する。トムスンの主体的行為は理性的で知識に基づくものというよりは、自発的で主意的な特性を付与されている¹⁸⁾。主観と客観を媒介し構造を過程に変える手段である経験が、トムスンによって適切に把握されていない。歴史の中の経験が、そのまま歴史から学ぶことにはならない。トムスンは経験と社会的存在を結びつけるように努力しているが、そこには主要な制度上の変化の過程が欠落している。トムスンは客観的な規定要因と主観的な経験の複雑な絡み合いを実際にはほとんど分析できていない。以上のようにアンダーソンは批判する。

ギデنزには次に、論争の中心論点である階級と歴史について検討を進める。トムスンは闘争の過程における共通の関心の自覚なしに階級は成立しないと考えるが、アンダーソンからすれば、それはあまり意味のない階級概念であり、客観性と主観性が交差する部分の考察の方法をトムスンは鍛える必要があると批判する。

トムスンは主体的行為における個人的な動機づけが階級の影響を受け、歴史は階級関係における活動によって生成されるとも主張するが、アンダーソンは主観的同一性を重視するトムスンの階級概念はそれと食い違っていると指摘し批判する。歴史的過程が社会の秩序を生み出すとすれば、それは共同価値の合意なのか、権力による強制なのかという議論があるが、そのような合意と

18) 邦訳では助詞の混乱で「主体的行為」の定義とは読み取れなくなっている。

Giddens (1987 : 211=1998 : 284)

強制の対立はすでにマルクスによって克服されていたと、アンダーソンは考える。

フランスの構造主義的マルクス主義者アルチュセールは歴史における構造の必然性を重視し、トムスは主体的行為の潜在的可能性に執着している。また、アルチュセールは主体性を奪い、トムスは発展段階論に反逆する。そのような対立点は、マルクスが唯物史観においてすでに乗り越えていたとアンダーソンは指摘する。階級間の闘争が交錯している生産力と生産関係の矛盾という装置である¹⁹⁾。

以上のように、トムスの主張を紹介し、それに対するアンダーソンの批判を紹介したギデンズは、この論争の中心的な論点について最後に解釈と評価を次のように示す。

トムスは行為への構造的な制約の把握に問題があり、アルチュセールの立場では行為の主体性の説明が不十分である。主体的行為と構造の問題は二元論では解決できない。ここにアンダーソンも見逃した問題点がある。人間の主体的な行為の特性は、別様に行為可能な能力と、リフレクシブなモニタリングである。人間の行動がより大きな全体社会のなかに個人の行動をいかに統合していくのかという問題こそ重要である。トムスの主体的行為の属性の第1は、歴史によって作られ歴史を作ること、第2に、下からの歴史形成を可能にすること、第3に、日常の出来事ないし日常の活動であること、第4に、歴史は常に偶発的な出来事であることだ。この中で本当に重要なのは第1の意味である。第2から第4は、第1の「歴史によって作られ歴史を作る」とは関係ないし、そのような主体的行為は私的利益に基づく行為と同じではない。主体的行為の歴史との関係についての理解は、行為者のレベルから始められないとアンダーソンは主張するが、そうではない。

19) 生産力の「力」=forceが生産と切り離され権力と訳されている。Giddens (1987: 214=1998: 288)

この論争の欠点は「構造の二元性」という視点の欠落にある²⁰⁾。主体的行為の理解は、構造と構造的拘束の概念的把握が必要だが、トムスンもアンダーソンも不十分である。構造か行為かという二元論ではなく、構造の二元性という理解、構造は行為の条件でもあり帰結でもあるという理解が必要なのだ、とギデنزらは主張する。それが構造化の理論枠組みである。構造とは空間と時間において再生産される社会システムに関連した規則と資源であり、主体的行為は構造を再生産する媒体である。人間は自分の行為の意味を理解している。しかし、未知の構造的条件はあるし、意図せざる結果も生み出される。なお、構造の拘束性、すなわち人間の行為への制約には次の4つがある。第1に、社会制度の時間的空間的広がりによる拘束、第2に、制度の中に埋め込まれたものによる拘束、第3に、選択の範囲を限定しようとする制裁による拘束、第4に、生産や再生産の可能性の条件についての理解の限界による拘束である。

すべての社会的再生産は人間が行為をモニタリングしながら状況に応じて達成される。しかし、社会変動につながる再生産の状況をコントロールする試みが生じるのは文字の発明、書字の出現以降、いわば歴史の創造以降のことである。伝統社会でも組織はあった。しかし、歴史性が発展したのは近代になってからだ。社会的行動のリフレクシブなモニタリングが社会的再生産に及ぶのは組織生成以降のことであり、近代においてこそ組織が発展しやすいだけでなく運動が形成されやすい。ただし、労働運動だけが運動ではない²¹⁾。

20) 構造の二元性ではなく構造の二重性と訳される場合もあるが（宮本，1998：33，41，169），ここでは構造の二元性というGiddens（1987＝1998：295）の表記に従う。

21) ギデنزらは、近代・現代の歴史形成の主役を演じてきた労働運動が、マルクスの予言とは違って、すべての現代社会の問題の解決を担う可能性をもっているわけではないとする。なお、近代・現代の歴史的動向に強い影響を与える運動として、Giddens（1985：310－25＝1999：355－70）において労働運動、民主運動、平和運動、環境運動があげられ、Giddens（1987：22－51＝98：37－78）所収の「社会学の九つのテーゼ」の第八のテーゼではこれに宗教運動や女性運動が付け加えられている。

さらに注意すべきは、アンダーソンの判断とは異なり、歴史性の強化は制御可能性の拡大ではないことだ。偶発的な意図せざる帰結がある。もちろんトムスンもアンダーソンも意図せざる結果については承知しているが、意図せざる行為の結果が未知の予期しないことを引き起こすというだけではなく、構造を再生産することを見ていない。構造の再生産を機能主義的な視点であるとして反対するのは妥当だが、それが社会的再生産の条件を無視する方向に行くならばそれは間違いである。

歴史家と社会学者は研究目的次第で区別されるが、基本的には同じである。トムスンの著作は独創的で影響力があり、トムスは構造主義的発想の社会学を批判し、歴史学と社会学を対置するが、そのような社会学が社会学のすべてではない。構造概念への不信が、下層民衆に焦点を合わせた歴史記述、偶発的な特殊事象の強調に帰着するのは適切ではない。トムスンの文章力がその難点を覆い隠しているが、彼に欠落している前述の構造の二元性という発想が必要である。

以上のようにギデンズは、アンダーソンの構造主義的な立場と、トムスンの人間中心的・行為中心的な理論的・思想的立場との対立の止揚を図った。このギデンズの主張は、この論文とほぼ同時期に刊行された84年の『社会の構成』においてすでに準備されていた。それは、第一章「構造化理論の要綱」、第二章「意識、自我、および社会的出会い」、第三章「時間、空間、および域化」、第四章「構造、システム、社会的再生産」、第五章「変動、進化、およびパワー」、第六章「構造化理論、経験的研究、および社会批判」というように構成されており、運動は第四章「構造、システム、および社会的再生産」の最終節「歴史の形成」で論じられているのであった²²⁾。

まず、アソシエーションと組織と運動が区別される。アソシエーション概念は、すでに伝統化し規則化した知識の適用によって、社会の再生産の条件を維持する集団に与えられる名称である。それに対して、組織と運動は「シ

22) 「歴史の形成」の要点については宮本（1998：98-9）で紹介した。

システムの再生産の条件を反省的に規制する集合体」と定義される。いわば、社会についてなんらかの問題を見だし、その問題を解決しようとして行為し活動するのが、組織であり運動なのであり、問題を見いだすことなく伝統に定められた定型的な行為や活動を実践していくのがアソシエーションなのである。では組織と運動はいかに区別されるのか。組織は現行の社会秩序の大枠の内部での問題解決をめざすのに対して、運動は秩序それ自体の問題化にまでも進む可能性をもつものだとギデンズは位置づけるのである。

トムスンの立場は、歴史を形成する主体としての人間の行為と運動を重視する主体主義であり、そのような立場からすれば、あらかじめ仕組まれたオーラリ伯爵のゼンマイ仕掛けの中に人間を押し込めるがごとき構造主義的傾向は、全く許容できないところであった。しかし、アンダーソンらの側からすれば、人間の意識という主観性と、その社会的存在条件という客観性との弁証法に拠っているとはいえ、人間の主観的意味とそれに基づく選択によって変動するものとして歴史をとらえるトムスンの基本的観点は、マルクス主義の歴史観と相反するものと見なさざるをえなかった。マルクス主義の歴史観は、歴史を社会的再生産の条件に作用されて法則的に変動するものとして把握するからである

ギデンズは両者の立場をそれぞれが一面的であると判定する。というのも両者とも、行為か構造かという二者択一のもとで自らの主張を根拠づけているからである。ギデンズは歴史を形成する主体の作用を重視するトムスンの立場に賛意を表しながらも、トムスンが個人の行為の意図や理由とは関係なく作用する社会的再生産の条件を無視する点を批判する。トムスンが組織や運動を、歴史を形成する主体として位置づけることは正しいが、行為や運動の制約条件である構造を無視することは誤りである。トムスンは社会的存在条件を把握してはいるが、それは構造ではなく不定形な条件にすぎない。構造は行為や運動の制約条件であるとともに、それらを可能にする条件でもあり、そのように構造を把握することが歴史の社会学的分析に不可欠であると

ギデンズは主張するのである。

第3節 福祉国家と市民権——トマス・H・マーシャル

ギデンズはシティズンシップ・ライトすなわち市民権と階級との関連についてのマーシャルの著作（Marshall, 1950）について、Giddens（1973=1977）以来、多くの著作で批判的に言及していた²³⁾。ギデンズのマーシャル批判の論点は、次の三つであった。第1に、マーシャルは市民権の拡大と普及が階級社会を市民社会に変容させると考えていたが、実際には市民権は階級社会と親和的であり、市民権はむしろ階級社会を前提としていた。第2に、市民権はマーシャルの考えるように進化論的に拡大し普及するのではなく、それぞれの市民権は運動と闘争の成果なのである。第3に、市民権の種類および分類はマーシャルとは違った視点も可能であり、それぞれの権利の相互関連もマーシャルが言うほど単純ではない。そのようなマーシャルについて、ギデンズは94年にサザンプトン大学で講演を行った。その草稿がGiddens（1996）に収録されている‘T. H. Marshall, the State and Democracy’である。

そこでは新たな論点が示される。マーシャルはシティズンシップの統合的機能と階級の分化的機能を対比させ、シティズンシップの進化論的發展を描いたが、ギデンズはそれを民主主義の進化の理論と見なし、そのような視点から以下のようにマーシャル論を展開していく。

マーシャルはマルクス主義を批判し、さらにナチズムを批判した。暴力革命や戦争国家を否定し、福祉国家としての国民国家を提唱した。改革的社会主義の立場である。階級的不平等は資本主義社会には不可避であり、それを福祉国家という国民社会によって包摂する。したがってマーシャルの市民権の議論は福祉国家論となる。

23) Giddens（1973：156-7=1977：159-60）、Giddens（1981：14, 192, 226-9）、Giddens（1985：28, 200, 202-9, 319-20=1999：40, 231, 233-40, 364-5）、Giddens（1994：60-1, 69-71, 73-5, 132=2002：83-4, 94-6, 99-102, 171）

マーシャルはマルクスに批判的であるが、ギデンズはマルクスもまた民主主義の立場であり、革命は民主主義の深化発展と見なす。マルクスの時代には、政治的市民権は限定的であり、さらにその権利は経済的市民権に連動していかなかった。マーシャルはマルクスの民主化論を別様に表現したともいえる。ただし、マーシャルはマルクスより法的市民権（公民権）の重要性を認知していた²⁴⁾。それは国家権力の行き過ぎや暴力と強制の組織的行使に対抗して個人の自由が確保される権利である。マーシャルはマルクスのように経済的市民権を主張しなかったが、福祉を享受する権利は経済的市民権であり、政治的権利と公民権と並んで市民を社会に包摂し統合する。

マーシャルが民主主義自体についてそれほど語っていないのは、主要な関心が福祉国家にあったからである。しかし、福祉国家が民主化の成果であることは認めていた。ただし、政治的市民権は当然のものとマーシャルは考えていた。マーシャルの著作が刊行された時代は福祉国家が上昇気運にあった。しかし、この20年ほどの時代には、福祉国家批判の流れが強まり、ネオリベリズムによってそれが強力に主張されるようになった。彼らは福祉国家が依存症と無気力を蔓延させると非難する。福祉国家は貧困な人々を救うどころか、排除された底辺階級を生み出しているというのである。

マーシャルの社会構想が崩壊の危機にあるとしても、それはネオリベリズムのためだけではない。マーシャルはイギリスだけを見ていた。いわば一国福祉国家論である。しかし、国家を超えた出来事や構造が現在の社会に大きな影響を及ぼし、福祉国家に困難をもたらしていることを直視すべきである。マーシャルは民主主義的関心の拡大にも、民主主義が直面する困難についても説明の努力をしなかった。

24) シティズンシップ、シティズンシップ・ライト、シヴィル・ライトの訳語については、権利と義務を含む市民資格全般についてはシティズンシップとカタカナ表記し、シティズンシップ・ライトは市民権、そしてシヴィル・ライトは公民権としたい。シヴィル・ライトを市民権とすると、それを狭義の市民権、それを含む参政権や経済的社会的権利の全体を広義の市民権としなければならなくなる。この点については時安（2009）が参考になる。

ネオリベラリズムは世界的な影響力を持っているが、民主化のグローバル化も起こった。共産主義国は崩壊し、権威主義国家も倒れた。しかし、自由民主主義のヨーロッパの資本主義国は福祉国家を脅かす種々の圧力に苦しめられている。そして国民は政治家不信、政府不信に陥っている。

こうして現在、マーシャルの議論の前提が疑われている。そこで三つの問いが設定される。民主化のグローバル化をどう説明するか、民主主義は自由民主主義だけか、民主主義的体制の諸問題と福祉国家の直面する諸問題とはどのようにつながっているのか。

マーシャルは自由民主主義の限界を明らかにしなかった。しかし、参加民主主義なき福祉国家は権威主義的体制であると信じていた。そこには市民文化が不可欠である。民主化には文化基礎が必要なのである。自由民主主義が適切に機能するためには広範な市民文化が不可欠である。

民主化はひ弱な花という議論がある。民主化された国家が民主的制度をうまく運用できるとは限らない。しかし、国民国家は民主化といえは自由民主主義であるとしてきた。ひ弱な花理論によっても、自由民主主義が他の政治制度よりも優れていることは間違いない。不完全だが他の制度よりも優れている。不完全なものを少しでもましなものに育てなければならないが、促成栽培は不可能であり、民主化が成功するには特定の条件が必要だ。

資本主義ないし市場主義が、個人主義や自由主義に結びついているのは事実だ。自由民主主義の条件が市場というのではなく、市場が個人主義や自由主義を育成するのである。市場は民主化に必要な文化的条件だ。

ギデンズは、民主主義は本当にひ弱な花なのかと問う。第1に、かつての日本とドイツのような権威主義国家が敗戦後民主主義国家に変貌した。第2に、東欧の社会主義社会の崩壊は民主化の流れであった。第3に、問題含みの自由民主主義が存続している。民主化のグローバル化は混乱や崩壊の過程をも伴っているが、自由民主主義の重要性は否定できない。それはひ弱ではなく、丈夫な花である。世界にそれは拡大しつつある。そして、民主主義は

自由民主主義とは限らない。その本場でさえ、自由民主主義は挑戦を受け、妥協しているのである。

民主主義は長い歴史を持つ市民文化が欠落していても大丈夫だ。促成的な構造的条件があれば根付くことが出来る、とギデنز²⁵⁾は考える。傷つきやすいが強いというべきである。民主主義化の流れは、多くの基本的社会変動の中にある。その第1の変動は、以上で示したようにグローバル化である。

第2の変動は脱伝統化である。脱伝統化といっても伝統が消えるわけではない。脱伝統化の要因の一つは社会運動、たとえばフェミニズム運動であり、二つ目の要因はグローバル化である。グローバル過程は多様性によって脱伝統の傾向を生む。伝統とは違う様式を知るからである。文化的コスモポリタニズムは伝統消失ではない。伝統は再構築され新たなダイナミズムを獲得する。脱伝統の重要な側面が原理主義の登場であり、それは政治的過激主義、民族的純化主義、断定的教義として反民主主義である。これはマーシャルが予想もしなかったことであろう。

原理主義は脱伝統への反動、近代への反動である。攻撃的で、純化傾向をもち、しかもグローバルな電子コミュニケーションによって連結される。原理主義は宗教的原理主義に限らない。産業主義的資本主義的文明との対話の拒否がその特徴である。伝統の正当化は他者とのコミュニケーションを拒否する傾向がある。

第3の変動は、社会的リフレキシビティの高度化である²⁵⁾。ウルリッヒ・ベックが指摘するように²⁶⁾、脱伝統化によって生き方のパターンが多様化した。生き方はもはや運命ではない。身体構造もジェンダーも可変的である。多様な情報と柔軟な知識によって人生の決定が下される。そして、社会的リフレキシビティの高度化は専門分化を促進し、しかも専門分化は断片化す

25) リフレキシビティについては宮本（2000）が詳しい。

26) Ulrich Beckは1945年生まれで2015年1月に亡くなったドイツの社会学者でギデنزとは共著（Beck, Giddens and Lush, 1994）があり、その社会理論の主要論点はリスク化、個人化、グローバル化である。

る。アクティブな世界は問いに満ち不透明となる。

そこに多様な制度的帰結がもたらされる。官僚制は非効率になり、リフレクシブな市民は労働規律を受け入れなくなる。官僚制的組織は、小規模な意思決定、下からの意思決定に取って代わられる。ますますアクティブでリフレクシブになった市民は、民主化を要求するとともに政治に失望する。政治的権威主義はまだ残っているが、官僚制が機能不全に陥ったように、政治的権威主義はもう限界にある。柔軟性と社会的包摂に應えられない。かといって権威主義の崩壊後に民主主義が来るとは限らない。社会の分裂や機能しない政府がもたらされる。

さらに、地域的制度が国境を越える変化に結びつき、人々の生活に影響を与える出来事が国境を超える。それらは社会的技術的変動の中で生じ、あらゆる人々が不確実性の認識を持つようになる。そして、民主主義社会では政治指導者の空手形によって政治への失望が生み出される。市民にはその実効性の欠如は明かだ。しかし、ポジティブな側面もある。民主主義の民主化がもたらされる。多数の人々の民主主義へのかかわり、実効的な政治のパワーの生成である。

民主主義の民主化は多様な要素を含んでいる。社会的可視性の強化による政治的権威主義や腐敗への批判がある。また、まだ制度化の具体像は見えないが、上下への権力の委譲への動きがある。ローカルとグローバルの新たな結びつきを実現しうる民主的形態を探求しなければならない。これからどうなるか不明だし、参加民主主義の不適切さや不可能さについても議論されてきた。しかし、事態は変わってきているとギデンズは考え、多くの論点の中で民主主義のメカニズムについて考察を進める。民主主義の二大要素は利害代表と発言権であるが、そこに対話が求められる。すなわち熟議民主主義であり、対話を通しての解決が求められ、慣用と和解が不可欠である。国家内政治だけでなく、ローカルにもグローバルにも、そして社会生活においても対話民主主義が求められている。その背景にはグローバル化、コスモポリタ

ン化がある。

グローバルコミュニケーションが地理的懸隔を克服し、コミュニケーションの新たな可能性が生まれたが、同時に社会的政治的暴力が生じた。原理主義は伝統を純化し、対話関係が不十分なところに入り込む。こうしてコミュニケーションの二つの方向性が生じる。グローバルにも人間関係的にもコミュニケーションによる相互理解が促進される反面、相互の嫌悪と憎しみによる相互憎悪も強まる。人々が否定的なコミュニケーションの渦に巻き込まれると、相互に見下しあい罵り合うことになる。対話民主主義は、グローバルな地平において、コスモポリタン民主主義となる。この新たなモデルを探求する課題に現在の世界は直面しているのである。

それではサブポリティクスにおいてはどうか。そこには対話型民主主義が可能な2つの領域がある。まず科学・技術がある。専門家と素人のリフレクシブな対話が必要である。たとえば、病気をめぐる患者と専門家の対話がある。医者宣告を受け入れるだけでなく、患者はアクティブな質問をする、そのようなコミュニケーションモデル、対話モデルに一層大規模な対話民主主義の可能性が開かれる。

サブポリティクスの第2の領域が個人的生活、純粹関係²⁷⁾、対話である。個人生活は脱伝統化の中で純粹関係となり、そこに対話型民主主義が生まれる。相互依存した平等な関係が成立し、非暴力で交渉と妥協が行われるという、まさに熟議民主主義である。民主主義は万能薬ではないが、相互のコミュニケーションの活性化、相互に敬意を払い尊重し合うという実践は対話民主主義の基盤である。

ギデンズは以上のように議論を展開してきたが、ここで議論がマーシャルのシティズンシップ論から離れてしまったと述べ、今一度、市民権と福祉国

27) 純粹関係とは、何らかの目的達成のための手段としての社会関係ではなく、その関係自体の維持がメンバーの目的であるような社会関係である。Giddens (1992 = 1995) は高度近代の親密関係は純粹関係化すると指摘している。

家の問題に立ち戻るとして次のように議論を続ける。現在、国民国家がグローバルズムとローカリズムの狭間で揺らいでいる。シティズンシップの重みがマーシャルの時代ほどなくなっているが、民主主義の民主化の問題として再構築しなければならない。すなわち福祉国家の新しい文脈で再考しなければならない。それは財政危機の問題だけではなく、福祉依存症の問題もある。それらをグローバル化、脱伝統化、リフレキシビティの高度化などの変動の中で再考しなければならない。

マーシャルが検討の対象とした福祉国家は、社会的ライフスタイルが今日より安定しており、生活も運命的なものであった時代のものであった。福祉国家は多様なリスクに国家が対抗できるという仮説に基づいていた。それらはいわば自然的なリスクであり、貧困や病気や障害や離婚はといった災難にあった人々を守るのが国家であった。しかし、アクティブでリフレクシブな不安定な現在では、それは不可能となった。離婚は少数事例ではなく、離婚は人生に当然のこととして福祉制度は織り込まなくてはならなくなった。すなわち大多数の人々がアクティブでリフレクシブな人生を送ることを織り込んだ制度を再構築しなければならない。民主主義とその可能性を再評価することを、シティズンシップの新思考と結合すべき時が到来したとギデンズは結論づける。

以上のように、ギデンズは90年代初めから本格的な展開を開始した高度近代社会論（Giddens, 1994=2002）において、マーシャルのシティズンシップ論をあらためて取り上げ、新たな社会構想にふさわしいシティズンシップ論を探求したのである。しかし、結論部に見られるように、ギデンズは問題設定をするにとどまり、この難題に具体的に応えることはできていない。第三の道の社会構想において提唱した新たな方向性は、部分的には1997年にイギリスで政権を奪取したニューレーパー（新しい労働党）によって実践されたが^{s28)}、多くの問題が未解決のまま持ち越され、さらにイラ

28) ギデンズと新労働党との関係については宮本（2007）を参照されたい。

ク戦争参戦責任問題もあって労働党は2011年に保守党に政権を奪い返され、2016年には移民問題や難民問題をめぐって国民投票でEU離脱が選択されるまでにイギリス社会は混乱している。福祉国家の見直しはイギリス社会だけでなく全世界を巻き込む現象であり、高度近代の変動は近代化の逆転現象を生んでいるかのようにも見える。Giddens (2013) も難問に果敢に取り組んでいるが、移民・難民問題を中心にした問題群の解決の方向性はまだ明確にはなっていない。われわれもまた引き続きそれらに取り組んでいかなければならないだろう。

おわりに

本稿では、ギデنزが社会学の世界を超えている3人のイギリス知識人について論じた理由を明らかにすることを試みた。1970年来のギデنزの旺盛な著作活動において社会理論研究が推進され、70年代半ばから80年代半ばにかけて構造化理論の構築が推進され、80年代を通して史的唯物論の現代的批判と国家論の展開が行われ、そこから生まれたモダニティへの問いが90年代に新しい社会の構想の体系的提示につながっていった。このようなギデنز社会理論の展開の重要な節目に、3人のイギリス知識人についての各論文が登場していたのである。

本稿が明らかにしたように、レイモンド・ウィリアムズ研究は、1970年代末から80年代初めにかけて史的唯物論の現代的批判をギデنزが準備する中で進められ、その視点からウィリアムズの文化唯物論が批判的に評価されていた。ギデنزの史的唯物論の内在的な再構築ではなく、史的唯物論を資本主義論に帰着する経済的次元に限定し、それとは区別される政治的、暴力的、イデオロギー的なパワー論の視点から史的唯物論を相対化する方針を採用したため、史的唯物論の文化論的批判の可能性にギデنزは関心をもったと思われる。ウィリアムズは言語や意味やコミュニケーションを生産関係や生産力といった概念に組み込むことによって、自らをマルクス主義的立場

にあることを明示しようとしたのであるが、ギデンズから見れば、それは史的唯物論を大前提とするにとどまり、それを文化論で相対化することができなくなると言わざるをえない。むしろラディカル・ポピュリズムという立場で文化を自在に論じ、文化革命という独自の変動軸を明示するほうが、たとえ文化中心主義になったとしても史的唯物論の相対化に貢献しうるとギデンズは考えたのではないだろうか。

ギデンズのトムスン研究は、構造化理論の決定版であるGiddens (1984=2015) を執筆する際にすでに基本的には出来上がっており、Giddens (1987=1998) に収録された論文は、その際の成果をトムスンの著作の内容紹介とそれに対するアンダーソンの批判の紹介も兼ねてあらためて詳細に展開したものであった。いわばイギリスマルクス主義を代表するニューレフトの新旧世代の論争を止揚する視点を、構造化理論は確立しえたとギデンズは考えたのであろう。

マーシャルの著作についてはGiddens (1973=1977) 以来、多くの著作でギデンズは言及してきた。ウィリアムズやトムスンに比較するとマーシャルはイギリスでは社会学者として見なされることが多い知識人である。彼のシティズンシップないしシティズンシップ・ライト論は近代化およびそこにおける国民国家の生成と発展過程を分析する際に不可欠な概念と枠組みを提供してくれる。ギデンズはグローバル化、脱伝統化、リフレキシビティの高進というハイモダニティの変動の中で、ポスト福祉国家の新しい社会の構想を90年代以来打ち出そうと努めてきた。しかし、イギリス社会が第三の道を順調に歩んできたとは到底いえない現実がある。難民問題で揺れEU離脱の過程にあるイギリスのみならず、国民国家の閉鎖化、島国化が懸念される現代世界において、マーシャルの議論を踏まえたギデンズのシティズンシップないしシティズンシップ・ライト論の問題提起は重要な課題をわれわれに遺したということを忘れてはならない。

参照文献一覧

- 大貫隆史, 2016, 『わたしのソーシャリズム——20世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ』研究社。
- Giddens, A., 1971, *Capitalism and Modern Social Theory*, Cambridge University Press. (=1974, 犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』研究社。)
- , 1973, *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson. (=1977, 市川統洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房。)
- , 1979, *Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press. (=1989, 友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』ハーベスト社。)
- , 1981, *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press.
- , 1982, *Profiles and Critiques in Social Theory*, The Macmillan Press.
- , 1984, *Constitution of Society*, Polity Press. (=2015, 門田健一訳『社会の構成』勁草書房。)
- , 1985, *Nation-State and Violence*, Polity Press. (=1999, 松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房。)
- , 1987, *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press. (=1998, 藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店。)
- , 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Society*, Stanford University Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房。)
- , 1994, *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press. (=2002, 松尾精文・立松隆介訳『左派右派を超えて』而立書房。)
- , 1996, *In Defence of Sociology: Essays, Interpretations & Rejoinders*, Polity Press.
- and Christopher Pierson, 1998, *Conversations with Anthony Giddens*, Polity Press. (=2001, 松尾精文訳『ギデنزとの対話』而立書房。)
- , 2013, *Turbulent & Mighty Continent: What Future for Europe?*, Polity Press. (=2015, 脇阪紀行訳『揺れる大欧州——未来への変革の時』岩波書店。)
- 高山智樹, 2010, 『レイモンド・ウィリアムズ——希望への手がかり』彩流社。
- 時安邦治, 2009, 「T. H. マーシャル『シティズンシップと社会的階級』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス第9巻: 政治・権力・公共性』世界思想社。

- Beck, U., A. Giddens, and S. Lash, 1994, *Reflexive Modernization*, Polity Press.
(=1997, 松尾精文ほか訳『再帰的近代化』而立書房。)
- Marshall, T. H., 1950, *Citizenship and Social Class : and Other Essays*, Cambridge University Press. (=1993, 岩崎信彦・中村健吾訳『シティズンシップと社会的階級』法律文化社。)
- 宮本孝二, 1998, 『ギデンズの社会理論——その全体像と可能性』八千代出版。
- , 2000, 「社会学とリフレクシヴィティ」『ソシオロジ』45巻1号。
- , 2007, 「『第三の道』の社会理論——ギデンズの社会構想」『桃山学院大学社会学論集』41巻1号。
- , 2011, 「構造化理論——A. ギデンズ『社会学の新しい方法規準』(1976)」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス別巻：社会学的思考』世界思想社。
- , 2015a, 「ギデンズのウェーバー研究——社会理論の中心問題」『桃山学院大学社会学論集』48巻2号。
- , 2015b, 「ギデンズのデュルケム研究——デュルケム社会理論再考」『桃山学院大学社会学論集』49巻1号。
- , 2016a, 「ギデンズのマルクス研究——近代社会の構造と変動」『桃山学院大学社会学論集』49巻2号。
- , 2016b, 「ギデンズのゴフマン研究——構造化理論の体系化」『桃山学院大学社会学論集』50巻1号。
- 山田雄三, 2013, 『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち——英語圏モダニズムの政治と文学』松柏社。
- 吉澤弥生, 1999, 「ウィリアムズの文学社会学」『年報人間科学』20巻2号。
- , 2001, 「レイモンド・ウィリアムズとメディア社会学」『社会学評論』52巻1号。
- , 2009, 「R. ウィリアムズ『文化と社会』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス第3巻：文化の社会学』世界思想社。
- Lin Chun (林春), 1993, *The British New Left*, Edinburgh University Press. (=1999, 渡辺雅男訳『イギリスのニューレフト——カルチュラル・スタディーズの源流』彩流社)。

Anthony Giddens and British Intellectuals :

R. Williams, E. P. Thompson, T. H. Marshall

MIYAMOTO Koji

This paper, the fifth one of my project 'Giddens and Sociologists', aims to explore reasons why Anthony Giddens, one of most famous sociologists in the contemporary world, wrote papers concerning British intellectuals; Raymond Williams, Edward Palmer Thompson, and Thomas Humphrey Marshall. Williams(1921-88) was the Marxist literary critic and cultural historian whose works have exerted an extraordinary influence over the development of *the Cultural Studies*. Thompson (1924-93) was the social historian and a leading participant in the new left movements. Marshall (1893-1981) is remembered above all for the brilliance of his work on citizenship which has influenced studies of the social policy and welfare state. The main findings are as follows.

Giddens wrote each paper at each epoch-making stage in the development of his social theory. First, Giddens could find weak points of William's cultural materialism, because he was preparing to publish *Contemporary Critique of Historical Materialism* in 1981. Second, when he accomplished his structuration theory in 1984, he could get a viewpoint to criticize Thompson' subjectivism in his *The Making of the English Working Class*. Third, in his works on the third way in 1990s, Giddens tried to seek for new trends of post welfare state by rethinking the theory of citizenship rights Marshall showed clearly in his *Citizenship and Social Class*.

Keywords : A. Giddens, R. Williams, E. P. Thompson, T. H. Marshall